

日本古典文學大系 57

川柳狂歌集

杉本長重
濱田義一郎 校注

岩波書店刊行

川柳 狂歌集

日本古典文学大系 57

昭和 33 年 12 月 5 日 第 1 刷 発行 ©

定価 650 円



校 注 者

す 杉 も と な が し げ
は ま だ ん ぎ い ち ろ う
濱 田 義 一 郎

発 行 者

東京都千代田区神田一ツ橋2ノ3
岩 波 雄 二 郎

印 刷 者

東京都青梅市根ヶ布 385
山 田 一 雄

発 行 所

東京都千代田区 株式
神田一ツ橋2ノ3 会社

岩 波 書 店

落丁本・乱丁本はお取替いたします

日本古典文学大系

別 巻 総 索 引

引 換 券

(川柳 狂歌集)



66—20

全66巻御購入の方に限り有効。完結次第この引換券を切りとり、御購入書店へお渡し下さい。総索引を贈呈。

岩 波 書 店

目次

川柳集

解 説 五

凡 例 二五

誹風柳多留(抄) 二七

誹風柳多留拾遺(抄) 二九

狂歌集

解 説 二六七

凡 例 二九五

徳和歌後万載集 二九七

蜀山百首 四五三

吾妻曲狂歌文庫.....	四七
作者索引.....	五〇三

川
柳
集

杉
本
長
重
校
注

解 説

川柳は和歌・俳句と同じくわが国特有の短詩文芸である。ともに短小な形式ゆえに、多くの読者をもつと同時に、作者にも多数の人の参加を得て、広く国民の間に行われて来た。中でも川柳は、そのおい立ちが黄表紙・小咄・洒落本・滑稽本などの庶民文芸を生んだ江戸の時代であったため、和歌や俳句がどちらかといえば「優雅」さを求めたのに対し、川柳はあくまで「卑俗」さに徹したところに、文芸としては高い位置を与えられぬにしても、階級的にいつてその愛好された範囲は広がった。この最も庶民的な庶民文芸としての川柳について、その古典ともいふべき「柳多留」を中心に解説を試みるに当り、一つの手がかりとするため、「柳多留」初篇に掲げた序を引用したい。

さみだれのつれ／＼に、あそこの隅こゝの棚よりふるとしの前句附のすりものをさがし出し、机のうへに詠る折ふし、書肆何某来りて、此儘に反古になさん本意なしといへるにまかせ、一句にて句意のわかり安きを挙て一帖となしぬ。なかんづく当世誹風の余情をむすべる秀吟等あれば、いもせ川柳樽と題す。于時明和二酉仲夏、浅下の麓、呉陵軒可有述。(句読・濁点は解説者がつけた)

一 前句付

まず、「前句附のすりものをさがし出し」「一句にて句意のわかり安きを挙て一帖となしぬ」という記述は、われわれ

のいう「川柳」(この名称は、実は遙か後になって固定するのであるが)という文芸形態が嚴密な意味で誕生したことを語るのであるが、同時にそれが「前句付」という形式を母胎としていることを告げる。ここに川柳の本質・特性を知るに先立って、前句付の大概を知っておく必要がある。

前句付は字義通り、前句に後句を付ける(「付句」をする)こと、すなわち俳諧の十四音句に十七音句を、十七音句に十四音句をつけることで、いわば五十韻・百韻または歌仙などという形式で多数の句を続ける俳諧(連句)の一部を切り離したものの、あるいは最も簡單化された俳諧と見られるものである。実は、元禄十五年刊の前句付集「若えびす」に

俳諧の稽古に付てさまざまの習ひあり、人に上中下根あるに隨て、道に発句合、前句合、笠付あり、其器量に應じて其教る格も別也、たとへば、かいもくなる初心の人には、笠付を以て平句を仕ならはせ、扱少し功の行たる時、前句附を仕ならはせ、付はだへを覚えさせ、それも功の行たる時、発句合せをさせて、句作のよしあしを知らずる事なり

とあるように、俳諧への入門階梯として、俳諧で重んずる前句と付句との間の付味を理解会得させ、その付け方を練習する意味で試みられたのが、やがて俳諧の普及が下層の社会にまでひろがるにつれ、俳諧の形式の煩瑣と内容の高雅さが厭われ、俳諧修業の意味を離れて、二句立ての簡易俳諧として取り上げられ、別個の展開を示すことになったもので、連歌への入門階梯としての俳諧がやがて一つの民衆文芸として独立した過程が思い出され、俳諧の自由性・卑俗性を更に発展させたものとも見ることが出来る。

この前句付の起原に関しては、「延宝の頃」とする説(菊岡沾涼「近代世事談」)、「貞享より」とする説(曳尾庵南竹「我衣」)、「元禄の初」とする説(太宰春台「独語」)など諸説まちまちであるが、この点に関し説く所のかなり詳細なのは「俳諧高

天鷲〔鶴寿軒良弘編、元禄九年刊〕の序で、

去る万治年中に、泉州堺に池島氏成之といふ好士有りし、其頃河州小山村に日暮氏とやらん重興と名乗たる能書有りし、此人成之の前句を取初て、六句附といふ事を始られたり、四季の句に恋にても名所の句にても加へて、六句に十銅づゝ集め、褒美といふ事もなく、巻勝にして河州の誹友是を楽しめり、是ぞ此道の最初なる、予是を興有る事におもひ、同く成之の前句を取りて和州の清書をはじめけり

とあるが、これらを参考に、元禄五年刊の「前句咲やこの花」長点〔大坂、静竹窓菊子編、今日残存する最古の前句付集〕をはじめめとしてかなりの数に及ぶ前句付集の刊行状況をあわせ考えると、元禄以前いつの頃からか明確にできぬが、まず上方、それも地方に試みられ始めたものが次第に流行して、元禄年間、京・大坂の都会地に入ると急速に流行の度を高め、やがて江戸をはじめ諸方にもひろがり、元禄の末から宝永の初にかけて最も盛に行われたものようである。

今、この時代の前句付集から一、二の例を拾ってその句風を見ると、

由平点

ちら／＼洩るゝ灯火の影

音程に雨に破れぬ芭蕉にて

戸を明けぬ内が男の思案なり

（元禄五年刊、「咲やこの花」）

不角点

いざ此春の笑ひ初せん

川柳集

水の賀に花簪はめよ吉野川

福引の高下小判と水二盃

(元禄十年刊、「江戸土産」)

うぢりくくとく

まけしなに又絵を見せるすだれ賣

いやゝのく

産む時は男の顔が鬼に見え

(元禄十四年刊、「俳諧寄太鼓」)

じやまになりけりく

門口をうたがあまつて行過ぎる

出たり入たり入たり出たり

子ごゝろに蚊や珍しきつり初め

(元禄十四年刊、「俳諧絹ばかま」)

どうもいはれぬく

下女部やに親仁の目金落ちて有

ぬらりくらりとく

団ツギでは思ふやうには叩たたかれず

(元禄十四年刊、「前句前句かはりこま」)

比較的初期の「咲やこの花」「江戸土産」等においては、前句も通常の俳諧の句で、付句もその前句を素直にうけて穩健なよみぶりで、本俳諧と変りなく、未だ俳諧修業の方便という域を脱していない感があるが、それに比して「俳諧寄太鼓」以下の例になると、著しくその内容が変化し、觀察・著想の奇抜さや、表現がより卑俗化しているのに気がつく。すなわち、二句立ての簡易俳諧としての、前句に付くという点は無視できぬとしても、付句一句の巧拙により重きをおき、つとめて機智をはたらかし、奇警な觀察や着想で人の目を引こうとする傾向が顯著に現われているのである。前句も、それに応じて付句の自由な発想に拘束を加えぬよう、「うぢりく」とく」の如き、極めて簡単な、軽いものとなっている。たとえば前掲の「団では」の句は、「寄太鼓」には

団では思ふ様には招かれず

の形で「あちらこちらく」の前句につけられており、また後の「柳多留」には

団ではにくらしい程たゝかれず

と焼き直されている。それだけ、この句は前句にかゝわらぬ独立性をもっているわけであるが、それはこの句に限らず「寄太鼓」以下の例句すべてに通ずる事で、しかも内容的にも前句を取ればそのまま「川柳」と見られる特質、卑俗性の上に立つ「おかしみ」と「うがち」とを具えている。これは、俳諧の平句である前句付の付句が、前句からの制約を退け、一句としての独立性を重んずる時、俳諧中で独立性を認められる唯一つの句「発句」との比較・相違が考えられ、そこに自然の中に余情の美としてのいわゆる「さび」を求める発句に對し、前句付の付句は主として人事を写して、その通俗さの底に潜む「おかしみ」を味わう方向に向ったものといえる。

二 武玉川

先に掲げた「風柳多留」初篇の序に「一句にて句意のわかり安きを挙て一帖となしぬ」とある通り、前句付の付句のうち内に在していた一句独立への志向を実現して、川柳という一形態を創始したことが、文学史上「柳多留」が一つの位置を占める意義であるが、実はそのかげに「俳武玉川」を始めとする俳諧の高点付句集の存在と、いわゆる点取俳諧の流行とを見のがすことができない。

「武玉川」は江戸座俳諧の宗匠慶紀逸の撰に成るもので、初篇は寛延三年十月に刊行され、その序に

日々愚判の卷々秀逸とする句々書留め置き侍るを、此度書肆の需に応じて梓に行侍る。右付合の句々その前句を添侍るべき所を、事繁ければこれを略す。見る人心に計りて知らるべきにや。

とある通り、俳諧中の付句のすぐれたものを前句を略して掲げたものである。実をいえばこういう試みは早く、元禄十五年刊の俳書「三河小町」(白雪撰)に例があり、近くは享保年中このかた、上方で松木淡々一派の「春秋閑」(享保十一年刊)・「万国燕」(同十三年刊)・「門柳曲」(同二十年刊)など多くの付句集に見られるのであるが、ここに特に「武玉川」を推す所以は、この書が「柳多留」刊行の数年前、すなわち宝暦十一年撰者の歿するまでに十五篇の多きを続刊して来た事実である。

なおまた、「武玉川」は俳諧の付句集であり、「柳多留」は前句付のそれであって、各々系統的には別個の存在で、直ちに同一視することのできぬのはいうまでもなく、「武玉川」が十七音句のみならず十四音句をあわせ載せたり、前句を省いたについても「事繁ければ」という便宜的・消極的な態度と「柳多留」の「一句にて句意のわかり安きを挙て」という積極的態度との間には明らかに一線が引かれるが、しかもなおこの両者の間に深いつながりが認められるのは、

内容上の問題がある。すなわち、「武玉川」において、付合に心を配るかたわら

誹諧はこと更に、句毎に曲有て、興をおもてとなさでは、誹諧の本意に叶ふべからず(六篇序)

とする、一句の趣向を重んずる態度と、その具体として、趣向の警拔さ、句調の輕快さが、前句を省略しても差支えを感じぬ独立性を帯び、川柳の句に通うものを持っている句の多いことである。今試みに初篇から明らかに川柳の句と同吟・同想・原作と思われるものをざっと拾って見ても

取付安い顔へ相談

談合は取付き安い顔へいひ(柳・三)

間夫の命拾ふて蚊に喰れ

間夫は首を捨て蚊に喰れ(柳・三〇)

子を誉て居る船の真中

まん中の子共をほめるわたし守(柳・一九)

主のない扇を遣ふ渡し守

たがあふぎだかつかつてるわたし守(柳・二〇)

三下りころせくと人通り

花の山いつころせの三下り(拾・初)

傘をさす手は持ぬけいせい

けいせいは傘をさす手はもたぬ也(柳・一九)

筏さし畳の上へ世をのがれ

筏乗りたゝみの上へ世をのがれ(拾・九)

經賣呼で家内の顔を見せ

初かつは家内残らず見た斗(柳・初)

日頃の意趣をはらす芋虫

いもむしで日ごろの意趣をはらしけり(拾・二)

関守の淋しい日には物とがめ

関守も淋しい日にはもの咎め(柳・三〇)

金にする声はあはれな寒の内

寒声も金にするのはあはれなり(拾・初)

吉原の屋根かと聞て伸上り

国者に屋根をおしへる中たんぼ(柳・初)

生酔の後通れば寄かゝり

生酔のうしろ通れば寄かゝり(柳・七)

女房は簾の内で直をこたへ

女房はせうじの内直をこたへ(柳・五)

泊客最う隣から人の口

泊り客近所では最なんのかの(柳・四)

負公事の方へ娘は行たがり

負公事の方へ娘は行たがり(柳・三〇)

女房の望岸を漕せる

きしばかりこがせたがるも女の氣柳・二二

遊行の供の口が利き過ぎ

そば切に遊行の供の口が過ぎ(拾・八)

よい男来る分散の礼

ぶんさんの礼にあるくは色男(柳・二二)

蠅をうつして代る関守

見附番蠅をうつして代り合(柳・二二)

など、枚挙にいとまなく、「黒主は武玉川から盗み出し」(拾・八)と柳家が諷したのも尤もとうなずけるが、それほど「武玉川」と川柳との間ではその内容的特性が接近しているのである。そして、これは単に「武玉川」のみに止まらず、当時数多く刊行された俳諧の高点付句集の一般的傾向で、江戸においてなお余勢を保持した貞門・談林の徒や、芭蕉歿後、「さび」や「軽み」の理念の真意を理解し得ず閑寂枯淡を嫌って華麗新奇を好んだ其角・嵐雪・沾徳系の末流たる、いわゆる「江戸座」宗匠の指導する江戸俳壇の風調に由来するものであった。「柳多留」の書名に「俳風」の二字をおき、初篇の序に「なかんづく当世俳風の余情をむすべる秀吟等あれば」といい、更に「当世の前句は俳諧の足代ともならんや」(二篇序)、「誹かにひとしき句躰を書拔」(三篇序)、「川叟(初代川柳の尊称、解説者注)万句合発し、めづらかなる言葉に当世のはいかいとひとしき句姿を新斧せしに」(四篇序)といっている「俳諧」は、そういう俳諧であり、「柳多留」時代の前句付は、そういう俳諧の更に卑俗的なものとしての地位をもっていたのである。

三 川柳の特性

これまで述べ来た所により、川柳が前句付から脱皮したものであり、その前句付が「柳多留」成立の当時、どのような俳諧を背景にしていたかを知る時、川柳の特性がどんなものであり、その由って来る所もおのずから察せられるであらう。

川柳の特性を説く場合、しばしば俳句との比較が行われ、「季題」や「切れ字」の拘束のないこと、句の終止に活用語の連用形が多く用いられることが挙げられ、また俳句が主として自然を対象として季感を中心とする、いわゆる「風雅」な趣きを内容とするのに対し、川柳はむしろ人事の世界に眼を着け、人情・風俗を活写して「滑稽」「諷刺」をむねとするといわれるが、それは俳句が俳諧の「発句」の独立したものであるのに対し、川柳が「平句」の独立したものの、いわば「一句立ての俳諧付句」である事に基づくことで、当然といえよう。なおまた、表現技巧の面で、貞門・談林ゆずりの縁語・懸詞や譬喩・文句取り等の使用の多いことも、前句付の地盤をなした俳諧およびその指導者を考えればうなずけることである。

川柳は極めて卑俗的な庶民の文学である。その素材や用語が庶民生活に根ざして、いかに通俗卑近であるかは、例を挙げるまでもなく、「柳多留」のどの頁を開いて見ても直ちに観取される。

大名は一年置に角をもぎ(柳・初)

鎗持をはじめてつれてふりかへり(柳・初)

など、たまたま武士の世界が取り上げられても、それは庶民の好奇の眼に覗かれたもので、実は「武士」という權威を剥いで、一個の人間として俗情を露呈させたところに「おかしみ」を感じているのである。一体、素材や用語の卑俗さ

がそのままで「おかしみ」を生む契機となることは、宗鑑の「大筑波集」などの初期の俳諧によっても知られるが、その卑俗さが尊貴・高雅・嚴肅などの觀念に結び付けられる時、「おかしみ」は一層効果を発するもので、たとえば

ひあふぎであたまをはれば笏で請(柳・二)

ほれ帳を九十九夜めにけして置(柳・三)

など、公卿に裏長屋の痴話喧嘩を思い寄せたり、絶世の美人小町を遊女めかすことによって滑稽味を強調したもので、いわゆる「詠史川柳」上の英雄・高僧・佳人の類はこういう取扱いをうけている。

煮賣屋の柱は馬に喰れけり(柳・初)

の句も、芭蕉の「道端の木槿は」の句のパロディーとして、高雅なものを卑俗化する滑稽をねらったもので、談林式の謡曲の文句取りも、謡曲を高雅なものと考えての、そういう意味があったのである。

素材や用語の卑俗さと共に、「おかしみ」をもたらす契機をなしているものは、着想・觀察・表現の奇警さである。

かみなりをまねて腹かけやつとさせ

米つきに所を聞けば汗をふき

腰帶をぬると腰は生きて来る

百両をほどけば人をしさらせる

夕だちの戸はいろ／＼にたてゝ見る

乳貰ひの袖につつばる鯉節

以上はいずれも「柳多留」初篇にある句で、いわゆる「写生句」として日常の所見を描いたもので、内容としては何の